
月の櫻 Lunatic Organic Blood

三山大河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の楔 Lunatic Organic Blood

【NNコード】

N8775D

【作者名】

三山大河

【あらすじ】

何でも屋兼剣士ラークと愉快な仲間達の冒険活劇。日々変わりない、簡単な依頼から全ての冒険が始まる。

序章 時を経ずして進むもの

「……」何処だろ？。

薄暗い霧の中、声が聞こえる。

「……こつから、僕はここにいるのだろう。」

その声はやや高いが青年の声のようだ。

「僕は……僕は誰なんだ……。」

青年の声が殺伐としたものに変わっていく。

「何で誰もいないんだあっ！！！答えてくれよ、僕の言葉に、問い合わせに……。」

薄暗い霧の中を彼の声が駆け抜けた。

まるで生きているかのように。

「ここは……何処なんだ……僕は誰だ……いつからここにいるんだあ！！！」

青年は同じ事しか口にしまじない。

記憶が無いのだ。

自分に関するあらゆること。

「誰か……誰か答えてくれよ……。」

青年の声は悲しみに満ちたものとなつた。

「そうだ……ここから出よう……そうすれば誰かに会える……僕が誰なのか分かる。」

青年の声は喜びに満ちた。

「……？」

しかし、青年の期待はすぐさま裏切られた。

「な、なんだよこれ……、何で僕はこんなものをつけているんだ。」

青年の両腕、両足首にはかせがかけられている。

何故かけられているのか、どうしてかける必要があるのかそれはわからない。

それは青年には重く、冷たく、そして…。

恐ろしい存在だった。いや…そう感じた。

そして、かせを繋ぎ止める鎖は霧の奥へと延々と延びている。

「僕が何をしたっていうんだあ…！僕は何をしたんだあ…！」

青年は混乱し始めた。

「こんなものつ、こんなもの、つこんなものぉ…！」

青年はかせを外そうともがいた。

だが、まだ何か自分を繋ぎ止める物がある。

それは、青年の胸に突き刺さると同時に空間 자체にも突き刺さっている物だった。

「剣…。」

青年はその剣を見ると何故か心が安らいだ。
剣には見覚えがある。

何処であろうつ。

「…”みんな”は…今”じるび”しているんだろうか…。」

ふと青年の言葉に”みんな”と言つ言葉がこぼれた。

青年自体何の事だかわからない。ただ”みんな”と言つと、心が温かくなるのを感じた。

「”みんな”、”みんな”、”みんな”…。」

つと、青年は言葉を口に出す。そうすると今までの苦惱が消えていく…気がした。

「あはははは…。」

青年は笑つた。自分に。

何がおかしいのか分からぬ、でもただたんに面白かった。

青年が今まで下を向いていた顔を上に向ける。

そして、彼は思わず声を出した。

「あ…、霧が…。」

霧が晴れている。そう言おうとしたが声にはならなかつた。なぜなら霧が晴れてよつやく分かつた。ここが何処なのか。自分が何者なのか。

自分は何をして何故ここにいてそして……”みんな”が指す、人物たちが誰なのかも。

「あ……そ……うだ……僕の名前は……」

青年が名前を言いかけたとき、再び霧が立ち込めた。

「な、何だ！？？」

青年の紅い瞳は輝きを失った。

そして……。

「……ここは何処だろう。」

薄暗い霧の中、声が聞こえる。

「……いつから僕はここにいるのだろう。」「

その声は紛れも無く、さつきの青年の声だ。

「僕は……僕は誰なんだ……。」

青年の声が殺伐としたものに変わっていく。

「何で誰もいないんだあつ！！！」

再び青年は薄暗い霧の中で問い合わせる。

「……いつから……。僕はここに……。」

青年の黒ずんだ紅き瞳から、一筋の水滴が零れ落ちる。

「何で僕だけがこんなことをしなくちゃいけないんだ……。」

青年の瞳からは次々と水滴が零れ落ちる。

「僕は……どうして……なんで……どうやつて……。」

潤んだ瞳と比べ、口元は微かに笑っている。

「……この霧は……この霧は一体、や、やめりや。僕の周りから消えてくれっ。」

青年は霧を払つた。

しかし霧など払うことはできるはずも無く、

ただ、ただ、ジャラジャラと鎌の音が耳に入るだけだった。

「誰に問い合わせても……いくら問い合わせても……答えが返つてこない……。

青年はふと胸に突き刺さった剣を見た。

「……蒼天……。」

剣の名前なのか、人の名前なのか青年にも分からぬ。

一点に見つめた剣を青年は確かに”蒼天”と呟くように言った。

自分の胸に突き刺さり、淡く光り輝くその剣を見つめて。

ふと青年は思った。

「この剣さえ…この剣さえ胸から抜ければ…。」

確実に致命傷を負わせているはずの剣は青年の胸に突き刺さったまま、ただ光り輝いていた。

胸に突き刺さる剣さえ抜ければ、ここから脱出できる気がしたのだ。

青年はすぐさま手を伸ばした。

「ぐつ…。」

ガチャッと音がする。

鎖が手を引き剣に触れることすら出来ない。

「何で…なんで…僕には剣さえも抜くことが出来ないのか…。」

青年は絶望した。

何時間、何年、いや何千年過ぎただろうか。

ここには時と言つものが無いらしい。

有るとすれば青年と、それを貫いている剣、繫ぎ止めている鎖、そして覆つている深い霧。

何もかもが消えてゆく、青年の言葉も記憶さえも。

青年は何をしたのか、何を求めたのか。

それは、この状況を作ったものにも分からぬ。

霧は真実をも覆い隠す。

意思があるように。

「…会いたい・・会いたい…、会つて話したい…。」

青年は呟いた。

しかし誰もその言葉を聞くものはいない。

「僕は…生きているのだろうか…死んでいるのだろうか…。」

青年は疑問に思った。

自分が死んでいるとすれば、ここは地獄で、

自分は罪を犯しここに幽閉されているのだと思つじ事ができる。

自分が死んでいると言つ証拠は胸に刺さつた剣が証明してくれる。
そう青年は自分に言い聞かせた。

「 そ…う…か…そ…う…だ…そ…う…だ…よ…・・僕はきつと死んでいるんだ。」

青年の紅い瞳から光が失われていく。

（ …き…め…い…で…・・。）

光を失いつつある青年の脳裏に声が聞こえた気がした。

（ 諦めないで…）

今度ははつきりと聞こえる。

青年の瞳に光が戻った。

「 僕は…僕は…一人じゃなかつたのか…。」

青年の瞳から止まる事を知らない涙が零れ落ちる。

（ 貴方はまだ諦めではいけない。）

青年に呼びかける声は女性のものだった。

「 僕は・・生きているのかい…？」

青年は問い掛けた。

（ ……。）

女性の声は聞こえない。

「 こ、答えてくれよ！」

青年は心が穏やかではない。

自分が死んでいるのかと言う問い合わせ 자체、聞くのが不安だった。
しかしさらに不安になるのは、女性の声がなくなることだった。

「 お願ひだ…何か・・何かしゃべつてくれ…！」

青年は叫んだ。

せつかく得ることが出来た話し相手を探して。

「 僕はだれなんだあ…！頼む・・答えてくれ…。」

青年から再び瞳から光が消えかかった瞬間。

（ …自分の名前…私の声まで・・私達の記憶まで…忘れてしまつた
の…。）

その悲しみに満ち溢れ、震えた声は青年に向けられたものではなか
つた。

しかし、青年は聞いていた。

「き、君は僕を知っているんだね！？じゃあ、僕は誰なんだ？
どうやつたらここから出られるだ？」

青年の瞳は輝きに満ち溢れ、涙をこぼし続けた。

ここから出られる。それが青年の唯一の望み。

そしてその手段を知っているのはこの女性だと、青年は思った。
(ここから出られる方法…そして貴方の名前は…。)

女性の声が聞こえた瞬間、霧が突風に巻き上げられた。
強い。

風は中々やまない。

そして女性の声も霧とともに消えてしまつて今は聞こえない。

「…また一人に…。」

青年の瞳から完全に光が失われた。

完全なる闇、五感の欠如。

だが青年の心に搖るぎは無かつた。

青年は心を鎖していたのだ。

しかし、青年が心を鎖したときに何故か今までつなぎとめていた鎖
は無い。

青年は何も言わず、胸に突き刺さった剣を引き抜き、そして闇の中
へ一人消えていった。

(もう…嫌だ…。)

青年は呟いた。

第一章 眼界に潜む悪意（前書き）

小説の本編になります。

少年剣士ラークと魔法術師リクス。

仕事を終えて都市リノーベルクへと帰路のエピソード。

第一章 眼界に潜む悪意

「そして、復活した聖神ジユノーと邪神ヴァルシュの戦いはまたしても人間の手で

終結を迎えましたとさ。」

やや小柄な紅い目をした少年は焚き火の前で切り倒された丸太に腰掛けている。

そして、ぱたんっと本を閉じ膝の上に置いた。

本を読み終えたようだ。

白いフード付きローブを身に纏つた少年の姿は性別の判別をややこしくしている。

夜の所為か今はフードはかぶっていない。

少年の靴は茶色の皮を足に巻きひもで縛つた簡易的な靴である。ブロンドの髪を後ろで束ね丸い銀メガネをかけた少年の瞳は焚き火の色で赤味を増していた。

少年は静かに紅の瞳を閉じ、本を革のリュックへと仕舞い込む。「ねえ、どう思う? ラーク、レオフォート遺跡で手に入れたこの・

・ 創神大戦の『記録書』の内容なんだけど。』

ラークと言う少年は剣を片手で抱え込む形で、真新しい切り株を枕に空を見上げていた。

焚き火の薪調達のために枯れ木を切り倒したらしい。

そのためラークという赤褐色の色をした髪の少年の隣には薪が山済みされていた。

剣士としてはやや小柄である。

さらに装備は青い半袖のシャツに白銅の胸当てと軽装である。

下には所々破れかけた綿素材で出来た白色のズボン、

さらに靴はというと獸の革を叩いて柔らかくし、硬い皮をひもで縛つた簡単なものであった。

焚き火越しに見る彼の瞳はやはり紅だったが、メガネの少年ほどは鮮やかではなかつた。

何処かしら悲しく切なさを感じさせるその瞳に反し、顔は普通の若者と同じじく表情豊かであった。

つと、メガネをかけた少年に呼ばれ赤褐色の頭が起き上がる。

「・・・・リクス・・・あのなあ・・・その昔話とその質問なんだが・・・それを手に入れてから

何回俺にすりや氣がすむんだ？」

ラークは剣を左足付近の古木に立てかけ、座りなおした。

『それ』とはもちろんリクスが革のリュックに仕舞い込んだ古びた本のことである。

「第一、そんな5000年も昔のこと本当にあつたって言ひ証拠なんて無いだろう。

考えるだけ無駄無駄、まったく、幾ら今回の依頼が骨董好きの大富豪だからって

そんなカビの生えた話の何処が面白いんだろうねえ。」

「違う、違うよ、8102年前だつてばあ。

ちゃんとラトリア城跡の壁画に記録されてるんだから。」

リクスは慌てて革のリュックからさつきの本を取り出した。

「証拠なら有るよ。さつきも言ったようにちゃんとラトリア王国跡やオレンントマウンテン跡も存在しているし、

それにこの大戦に使われたとされる龍神の創造した伝説の武器も発見されてるし。」

レンズの奥で紅い瞳を輝かせリクスは、

掠れて読めない古びた文字で書かれている本を指差しラークに迫る勢いで話す。

「ああ、分かつた分かつた、はいはい、もうわかりましたよセンセ。」

ラークは適当にやり過ごそうとした。

ラークの使つた『センセ』と言つ言葉の意味はよくわからない。

おそらくこの少年の職業なのである。」

「つむ・・・ああ、またでた、ラークの無関心癖。」

リクスはちょっと不機嫌そうにまた本をリュックにしまいこみ、焚き火に薪をたした。

「なあ、リクス。」

ふとラークは、いじけていたリクスに話し掛ける。

「な、なんだい？」

リクスのその反応はどこか喜びに満ちていた。

右手はすでにリュックの中の本を探っている。

自分の話を聞いてくれるのだとそう彼は思つたらしい。

「今回の依頼主の名前サツカつたつけ？」

ラークは薪を焚き火にくべた。

「違うよショウカ、ショウカ・ファイレスだつてば。」

「ああ、そうそう、ショウカ、ショウカ。幾らなんでも本人つてことはねえよな。」

「本人つて言うと？」

「その胡散臭い昔話のさ。」

「確かに同姓同名だからねえ。でも神話にでてくるショウカは人間だよ？」

もし本人だとして今生きてたら8000歳はゆうに超えてるつてば。」

リクスは笑つた。

「それに今回の依頼主は18歳の少女だよ？幾らなんでも偶然でしょう。」

焚き火の明かりの反射で曇ったレンズの向こうではリクスの瞳から涙がにじんでいる。

相当おかしいらしい。

「い、言つてみただけだ。まったく・・・幾ら同姓同名だからつっても普通18で

骨董収集を趣味にするかあ？」

「別に関係ないじゃん。ラーケだつて18で魔剣を集める趣味有るでしょ。」

ラーケはがばつと立ちあがる。

「ま、魔剣だけ集めたいわけじゃねえよ。遺跡とかにある武器みいんな魔剣だから

必然的にコレクションが魔剣になつちまうだけだ。本當なら聖剣のほうが・・・」

思わずリクスは吹き出した。

「じゃ、じゃあ、ラーケの最終目標はやつぱり『蒼天の剣』?」

ラーケは空を見上げた。

「そ、そうだよ・・・わ、悪いかよ。」

どうやら赤くなつた顔をリクスに見せまいと空を見上げたらしい。

「ん、なんかあ・・・それって矛盾してない?だつてさあラーケ。

君は創神大戦の

話に無関心・・・と言つか信じないのになになんでそれに出てくる伝説の武器を信じるの?」

「べ、べつにいいだろ、夢の一いつや一いつ・・・。」

「ラーケつて変なところで子供っぽいよね。昔、アースガルドの

『レッドティアーズ(赤き涙)』とまで言われた剣士が今では夢を語るんだもん。」

ラーケは切り株に腰をおろした。

「何度も言つてるだろ。別に好きで人を殺してきたわけじゃないし、それに『レッドティアーズ』なんて自分でつけた名前じゃない。奴はアースガルド陥落とともに一緒に死んだんだ。」

ラーケは深刻な顔をして焚き火に薪をたす。

「ん、そうだね。もう『君』の戦争は終わつたんだもんね。『彼』は必要ない。」

「ああ・・・。」

「そろそろ寝よう。明日の早朝出発しないと君の彼女が帰りが遅いつて泣き叫ぶよ?」

ラークはまた再び立ち上がった。

「か、彼女じやねえよ。あいつは・・・リナは昔つからの付き合いなんだよ。

アースガルドにいたときに良くそこの親父さん夫婦に世話になつてたから。

「そ、それだけだ・・・・・。」

「彼女は満更でもなさそうだけど?」

「ば、馬鹿何言ってやがつ・・・・こいつ寝てやがる・・・・。」

ラークは溜まつた『何か』を発散できず、魔物よけのため焚き火の火力を強め

普段肩に巻きつけて長いマントのようにしている布をかぶさり眠りについた。

焚き火の炎に照らされ少年一人は眠りについた。

辺りではフクロウが無き、静かさをいつそう引き立てていた。

空では年中丸い月が一人の人間を照らし出していた。
この世界で月は欠ける事が無い。それは独特な天体の位置に関係しているのだが

人々は神の加護の象徴と信じている。

それ故、天体の位置関係を明確にし、学会で発表した学者は少なからず多いが

皆、宗教裁判にかけられ発表をとり消すか主張し続ける者は処刑された。

宗教が絶対的権力をもつにつれ、人々からは次第に天体についての興味が薄れていった。

全て教会が用意した仮初めの真実を人々が受け入れた為である。

まだ太陽が昇らない深夜、ブロンドの髪をした少年の赤い瞳が開かれた。

「・・・・・起きてる・・・・?」

少年の声はハツキリしていた。

「あ・・・・・。」

ラークの声もハツキリしていた。

「なんか・・・静かだねえ。」

リクスはラークに当然のことを聞いた。

「あ・・・・静か過ぎるな・・・・。」

「うん・・・・。」

その時、爆音がまだ寝ている森一帯を揺り動かし、睡眼を奪つた。
「なあ・・・・リクス・・・このエリアの危険指定は何色のいくつ
だ？」

まだ調べてなかつたろ・・・確か。」

「ちょっと待つて、今調べるから。」

リクスはリュックから『ワールドガイド』と書かれた一つの本を取り、

ペラペラと調べ始めた。

その間も爆音は鳴り響いている。

「・・・・こりゃ、戦争でもはじまつたかあ？」

ラークから笑みがこぼれた。

「そんなわけ無いよ。今は冷戦のような状態なんだから・・・・。
あ、あつた。」

リクスは『フロートフォレスト』と書かれた場所を指差し読み始めた。

「読むね。ええ～っと、”危険指定レッド・レベル8、用事がある
のなら軍隊でも用意しやがれ”

だつてさ。」

ラークは剣を左手で握り締め今まで覆い被さつていた布をマントの
ようにすると形相を変えた。

「・・・・なんて依頼引き受けたんだつ！？聞いてねえぞまつた
く、レッド指定のレベル8だあ？」

レッド指定レベル8つたら、入つたら最後、下手すりや軍隊で

も壊滅的な打撃

を受けるんだぞ！？』

リクスもリュックの隣に置かれていた金の装飾が施され青い水晶が先端にはめ込まれた

ロッドを取り、ラークに反論する。

『この仕事受けなかつたりナの店の資金どづするつもりだつたのさ。それにいつも言つてるじゃないか。

ちゃんと後先考えてお金使つてつて。それで無くつても、仕事最近減つてきて困つてゐんだから。これじゃ研究所の資金調達もままならないし、

それ以前に生活自体がやばいんだから！』

「ああ・・・わかつた、わかつたからつて・・・。といひでこの爆音の正体分かるか？」

リクスは再び『ワールドガイド』を開く。

『ここに生息するグランドスコーピオンだと思つ。』

ラークは、妖々しく鈍く光る剣を抜いた。

「・・・・・つで、詳細なデータは？」

リクスはさらに『ワールドガイド』を捲る。

『グランドスコーピオン、全長・約30cm、体重・不明、種族：昆虫類、

習性：夜行性で熱を感じし動くものに攻撃を加え捕食する。だつてさあ。』

「へえへえ、30cmねえ・・・つで、この爆音の説明はどうつけらる？」

ラークは両手で剣を構え剣先を焚き火に向けたまま田をつぶりつて話しをした。

「ん、誰かが戦つてゐんぢやないの？」こいつら群生するらしいから、大方、巣にでも出くわしたんだよきっと。」

あたりをぴりぴりとした空気が流れ始めていた。
それに応じて爆音も近づいてくる。

「な、なあ・・・」れつて・・・爆薬の音じやなくて、足音だったりしてな・・・。」

ラークは苦笑いする。

「そんなわけ無いよ、だつてほら、ちゃんと火薬の匂にもするでしょ。」

リクスはくんくんと鼻を鳴らして笑う。

「そう願いたいが・・・、来るわっ！――」

ラークの言葉が早かつた。

そして、森の木々が一斉に悲鳴をあげ、倒された。

「・・・・でかいな・・・」のエビ・・・・。」

ラークはぽかあんつと口を開いた。

そんな無防備なラークに『エビ』のハサミが襲う。

しかし、『エビ』のハサミは空を切る。

今まで無防備に立ち尽くしていたラークの姿がそこには無い。

『エビ』は黒ずんだ巨体を8本ある足を巧みに動かし方向を変える。そして8つある目全てを使い標的を探した。

しかし、いずれの目もラークの姿を捉えることは無かつた。

そこで『エビ』は本を読んでいるブロンンドの少年に攻撃対象を移した。

「ねえ、ラーク。この生き物、図鑑に載つてないんだけど。」

標的にされた少年が口を開いた。

その隙に『エビ』の前にいた大きな一つのハサミが少年を襲う。

しかしまたしても空を切る。

だが今度はさつきのように標的を見失うことは無かつた。リクスが紙一重で攻撃をかわしていたからだ。

「ん~突然変異かなあ、ラーク。」

表情を変えず、さりにブロンドの髪の少年は話し掛けた。

その間にも『エビ』のハサミは空を斬り続けた。

恐ろしいことに『エビ』の攻撃を見ずに紙一重でかわしているのである。

「・・・じゃあ、まずこいつの動き封じていいか？」

ラークと呼ばれた赤い髪の少年の声が聞こえた。

『Hビ』はその声がした方向に驚いた。

自分の頭の上から聞こえるのだ。

「ん~こいつの装甲、普通の剣じゃ斬れねえな。リミッター外すか・・・?」

ラークは淡々としゃべる。

キイインッと金属音が鳴り響く。

「やつぱりな。おい、リクス。やつぱり普通の剣じゃ斬れねえ。」

ラークは余裕を見せる。

空かさず『エビ』がラークを振り落とそうと体を揺らした。

「おつとつと・・・。」

ラークからはまだ余裕の言葉がこぼれていた。

「ねえ、関節狙えば?」

リクスは簡単に言った。

「ん~それもやってみたんだが、無理っぽいぞ。」

「へえ・・・。どうする?逃げる?それとも鬼神化する?」

「鬼神化はしない・・・アレやるとかなりしんどいの知ってるだろ

う。」

「じゃあ、どうするの?」

「もちろん、倒す。こいつの装甲持つて帰ればリナが喜びそうだがらな。」

この戦闘の中一人の緊張感の無い会話は続いた。

しかし、その間も『エビ』の攻撃も続けていた。

「やつぱり、何だかんだ言つて彼女が好きなんだね。」

ブロンンドの髪の少年がメガネを光で曇らせながら喋る。

「ち、違つ・・・。おわあ・・・。」

リクスの一言によりラークは『Hビ』の揺さぶりによつて振り落とされた。

赤褐色の髪の少年は受身をとり地面との衝突のダメージを和らげ、

さらに反動を利用して立ち上がった。

「変な事言つから振り落とされちまつただろ!」

リクスは笑つた。

「いつも君は彼女のことになると、注意力散漫になるよねえ。」
リクスは革のリュックからまた別の本を取り出した。

「ん~仕方ないなあ。責任とりますかあ。」

そういうとまたリクスはペラペラと本のページを捲る。

「10秒だ。」

リクスに降りかかる『エビ』の攻撃を受け止めながらそつ
言つ。

「20秒かかりそつ。」

ラークの田つきが変わつた。

”渴”と言つ掛け声とともに、ラークが剣で受け止めていた『エビ』
のハサミが弾かれる。

「ダメだ。口答えしたペナルティで5秒だ! いくぞつ。」

「うわあ~マジ?! ?詠唱入れないと氣分乗らないから、

威力下がるけど・・・つてあう・・カウント始まつてるうつ。」

リクスの笑つていた目は瞬時に鋭く変貌した。

ブロンドの髪の少年が目をつぶると同時に、足元に光の円形状の方
陣が浮き上がる。

「ラーク、行くよ! 避けてね。」

「誰に物を言つている誰に・・・。」

リクスの紅い瞳が開かれた瞬間、大地から無数の氷柱が『エビ』に
串刺さる。

「うつはあ・・・いつ見てもえげつないなあ・・・。」

目を閉じたりクスをかばう形で全ての攻撃を受け止めていたラーク
はそここぼした。

無数の氷柱に貫かれ『エビ』は完全に沈黙していた。

「リクス・・・いつも思つんだが、威力下がつて無いだろ・・・絶

対。」

ブランドの髪の少年はメガネを中指で直しながら答える。

「詠唱しないと、魔法つて感じしないじゃん。」

「ただそれだけの理由でか？」

「うん、それだけ。」

ラークは”ハウツ”つとため息をつき、刃を確認し”キンツ”と剣を鞘に収めた。

そして、やれやれといった風に『エビ』の所為で散らばった荷物をまとめ始めた。

リクスも同様荷物をまとめ、消えてしまった焚き火を新たに点けた。
「ところでこいつ・・・一体なんなんだ？それにさっきの爆音・・・
いや、火薬の臭い・・・。」

二人はまた新しく燃え始めた炎を囲んだ。

「大方どつかの無知な冒険者の団体様が、こいつと出くわして交戦したんじゃないの？」

「へえ・・・どつかの無知な冒険者ねえ・・・。」

ラークは人事には思えなかつた。

現に自分達が出くわしているのだ。更に付け加えるならば自分達も交戦した。

リクスの言う『無知な冒険者』に該当している。

「さあ・・・なんか眠くなっちゃつた・・・そろそろ僕は寝るよ?」「俺もそうしたいんだがどうやら・・・そもそも行かないかもしけない・・・。」

リクスは半ば横になりかけた体を起こす。

「それは・・・まさか・・・。」

「そのまさか多分こいつは・・・その、お前が言つてたグランドスコープオンだと思う。」

リクスは軽く笑つた。

「そんなわけ無いよ、だつてグランドスコープオンはこんなに大きくないし、

それにサソリなんだから毒針の付いた尻尾もないよ?」

ラークは深紅の瞳を見開いた。

「・・・こいつの尻尾があつた附近から微かに火薬の臭いがする・。

おそらく・・・俺たち以外と交戦して爆薬か何かで尻尾をやられたんだろう。」

「ああ・・・本当だ。気がつかなかつたなあ。よく気がついたね、ラーク。」

「そりや・・・こいつの真上に乗つてたから、『気がつかない方がおかしい。』

「そうだね、でも良くなさミを交わしながら足場にして『エビ』の背中に乗れるね関心関心。」

ラークはため息をした。

「そのくらいできなきや、アカデミーなんて卒業できるわけが無い。」

「アカデミーとは各国に必ず一つ存在する機関で剣士科・魔術科の二つで構成されるいわば、兵士育成所である。

そして成績優秀者は騎士団へ入隊や国家顧問魔術師になる権利を得ることができる。

入学は年齢制限を問わず、完全実力主義のもとに成り立ち、年一回ある試験に合格すれば卒業できる。

普通の人間では習得過程5年は要するカリキュラムで組まれてはいるが自ずと例外もいる。

各科顧問の教官は年老いて戦線を退いた元アカデミー卒業者や教官採用試験に合格した者が

それぞれ得意分野に別れ教育に当たっている。

「それもそうだね。、剣士科最難関のフライティア帝国アカデミーを一年で卒業した

ラークさんなら当然だね。」

「そうか?別に普通にやつてただけなんだが。つてお前も人のこと

言える立場か？

魔術科最難関のセレワーズ自治国アカデミーを一年で卒業している
じゃないか。」

ラークは焚き火に薪をくべた。

「正確にはアカデミー入学以前に全部、魔術書読んで覚えてたんだ
けど、

ライセンスが無いとダメだつて親が勝手に入れたんだよ。
全部覚えてたから、授業聞いても丸分かりで、先読みできちゃう
から

アカデミーに通つたのは入学のときと始めての授業、それに試験
日と卒業のときの

四日だけだね。」

「そこまで行くと嫌味だな・・・。アカデミーの学生はさぞや・・・
地獄だつたろ？」

「え？ なんで？」

「いや・・・分からんなんらい。」

「ふうん・・・。」

ラークはさらに焚き火の炎を強め、思い出したように言つた。

「話を戻すが、こいつ・・・がもし『グランドスコーピオン』だつ
たらどうする・・・？」

深刻な目でメガネをかけたブロンドの髪を後ろで縛つた少年に話し
掛ける。

「だつたらつてなに？」

「・・・こいつら・・・群生するんだろ？」

「こんなに大きくなつたのに群生するわけ無いじゃん。孤立相だよ、
たぶん。」

「孤立相・・・何だそれ？」

ラークは剣を鞘から取りだし荷物から取り出した石で研ぎ始めた。
「ん~簡単に言うと生物界だと群れとはぐれちやつてたまたま食料
に恵まれ外敵がいな場合、

こんな感じに大きくなることがあるんだ。

もし群れで食料が豊富で外敵がない場所を発見した場合だつたとしても

食料の比率から考えてここまで大きくなるとは考えられないね。リクスは寝る準備に取り掛かつていた。

「そんなもんのかあ？」

「そんなもんなの、・・・お休み。」

リクスは布で体を覆うと目を閉じた。

ラークは無言のまま剣の手入れをしている。

また森にはしばし静寂が訪れた。

つが、ラークの予想は的中していた。

”ズドンッ”

さつきと似た地響きが森を揺り動かした。

”ズドンッ”

また地響きが鳴り響く。

「・・・やつぱり・・・。」

ラークはガクッと肩を降ろした。

「今日は厄日かなあ？」

地響きの主は確実にラーク達に近づいてきていた。

「オイッ、リクス起きろ、今度は逃げるぞっ！」

が反応が返つてこない。

「リクス！起きろって、・・・・・じいつ・・・完全に眠りやがった・・・。」

ラークはリクスの肩をつかみ物凄い勢いで前後にゆすつたが全然反応が無い。

反応があるとすれば眠るのに鬱陶しいラークの手を払うしぐさだけであった。

「・・・術者としては最高なんだが・・・じつなるとこいつ朝になるまで起きないんだよなあ・・・。」

ラークは独り言を呟くと、さつきまで丹念に磨いていた剣を鞘から

抜き、

リクスが串刺しにして沈黙させた通称『エビ』の装甲を適当な大きさに剥ぎ取り

簡易な盾を作り目を閉じた。

「本当なら盾なんて使いたくないが状況が状況だからな。これで奴の毒も何とかなるだろ。」

ラークは精神を研ぎ澄ましていった。

そして、数十体の黒い影がラークとリクスを取り囲んだ。

「28体・・いや・・・32体・・つてところか・・・何とかなるな・・・多分。」

ラークは完全深紅の瞳を見開いて『エビ』の群れへと疾走した。

先に攻撃を仕掛けたのは『エビ』だった。

無数の『エビ』の攻撃が全て空を斬る。

唯一、ぐさつと地面にハサミが突き刺さった『エビ』にラークは標的を変え、

後ろから来たハサミの上に乗りその慣性を利用してハサミが突き刺さった『エビ』に向け地面すれすれに跳躍した。

そして、ハサミを振り上げたその『エビ』の下にスライディングをすると

”渴”つと一声上げ『エビ』腹を突き刺した。

腹を突き刺された『エビ』は悲鳴をあげそして沈黙した。

「へえ・・・やっぱりな、意外に柔らかいぜ・・こいつら腹部が弱点か。」

ラークはそう呟くと無作為に30秒以内に24体を同じ方法で倒した。

25体目も同じ方法で倒そうとしたがラークは思わず『エビ』の反撃に合い大きなハサミで

巨木へと飛ばされた。

「こいつら・・・学習が早いなあ・・・。残り7体・・・どうしたも

のか・・・。」

そういうとラーケはスッと左手を腰の後ろへと回しビンの容器を取り出した。

そして上へと放り投げた。

その瞬間、まばゆい光が森の夜を奪つ。

「・・・。」

それと同時に疾走したラーケはさつきと同様に『エビ』の腹を串刺し3体倒した。

ラーケが投げたのは発光弾らしい。

「・・・後・・・4体・・・発光弾はもうねえし・・・。目潰しにもならなかつたみたいだ・・・。」

ラーケは後ろからち被くハサミを剣で方向を変え地面に突き刺されると、

攻撃してきた『エビ』へとスライディングし倒した。

「後・・・3体・・・。」

激しい運動をしているはずのラーケの息は乱れていない。
息を殺してもいないらしい。

そこへ、木の陰に隠れていた木ごとラーケをはさむハサミの攻撃が襲つた。

「うお・・・あぶねえ。」

間一髪、ラーケはよけていた。

よけていなければ、確実に胴体と頭が首を境に分離していた。
ハサミで切られた木は、テーブルのようにツルツルしていた。

「・・・熱感知か・・・やつかいだなあ・・・・・そうか!」

ラーケは何を思つたか、今まで何事も無かつたように寝ているリクスへと近寄つた。

そして、荷物から洞窟などで使用するランプを取り出しそのオイルを木にふりかけ

焚き火の火をオイルに引火させた。

案の定、木は音を立て燃え始めた。

「これで攻撃対象を絞れないだろ？・・・」

しかしラークの読みは外れた。

ハサミがラークにめがけて襲ってきたのだ。

当然ラークはよけた。

「・・・・ダメだったか、発光弾もダメ、これもダメ、こいつなると・・・どうなる？」

それにしてもこいつらどうやって敵を認知してるんだ？」

ラークは自身に自問自答したが返答は帰つてくることも無く、

容赦なく『エビ』の攻撃は続く。

「あ、やっぱりこいつ使わなきゃいけないのかあ・・・これ疲れるんだよなあ。」

愚痴とも取れる言葉がラークからこぼれる。

そしてラークは剣を地面に突き刺し叫んだ。

「『魔剣ノア』よ、真の姿を我の前に現し『鬼神』の力を解放せよ！！」

ラークが叫びると『魔剣』と呼ばれた剣からよういつそう妖々しい光が放たれる。

突き刺さった剣を抜き取るとラークの瞳は血の色のように輝く。

刹那、『エビ』1体が切り倒される。

前回までこの剣で切れなかつたはずの装甲が今度はいとも簡単に斬られていた。

残り2体となつた『エビ』の群れは1歩後退する。

しかし、また一体『血色の目の剣士』に斬られていた。

最後に残つた『エビ』は尻尾から毒を放つ。

しかし、くしくも味方の装甲で造られた盾にガードされ、そして沈黙した。

ラークは剣をまた地面に突き刺し『解除』と呴くそのまま倒れこんだ。

「はあ・・・はあ・・・やつぱマジ・・・これ辛すぎん・・・」

今まで息を切らさなかつたラークは汗を滝のようににかき、だるそう

に横になつていた。

そして、ラーカは眠りについた。

森に日がさし、朝日が夜を地平線の彼方へと追いやる。森では鳥の鳴き声だけが響き渡つていた。

二〇

ブロンドの髪の少年は覆い被さっていた布をとり、丸いレンズのメガネをかけ起き上がった。

た。

ラーケの気の抜けるような言葉がリクスの笑いを誘う。
毎日の三課だ。

「ああ。」
「あーク、そろそろリノーベルケに戻ろう。準備して。」

頭を搔きながらふらふらと散らばった荷物の整理をするその様子は、深夜、戦いを繰り広げた人物には思えない。

۱۱
؟

リクスの意味深な言葉が森の一部で小さく聞こえた。

第一章 死屍たる不老の狂戦士

巨岩の荒野の真つ只中にブロンドの点と少しほなれて赤褐色の点がある。

あちこち岩が転がり時折突き出だした岩盤が点在するため歩き難い。いわゆる難所と言つ奴である。人の通行を阻むかのような荒れ果てた大地である。

唯一、川が流れではいるものの水嵩が少なく、船での航行は不可能に近い。

水嵩が少ない分、川幅が広く大きな湖のように見える。

徒歩での移動も可能なだがそこには泥が堆積し、一日で渡りきることが出来ないため

一般的の旅人はこうして側面の平原を渡つていきその先にある橋を渡り街へと向かうのである。

「行きもそうだつたけど帰りもやつぱり歩き難いよこ」「・・・」

後ろ髪を縛ったブロンドの髪の少年がぼやぐ。リクスだ。

白いローブをなびかせ、少年は黙々と歩く。

なぜか旅をしているはずの少年は旅に必要な荷物を持つてはいない。持つているとすれば背中に背負つた革で出来た薬や書物の詰まつたリュックである。

ブロンドの髪の少年は一人出歩いていた。

「毎回思うけど、こんなに重量差があるのでラーケに置いて行かれるのってかなり屈辱・・・」

少年は魔術に使用する金の装飾の施されたローブを今は自分の体重を支える道具として使っていた。

「いくら僕がデスクワークタイプだからって、それなりに基盤体力はあるのに・・・」

メガネをかけた少年の愚痴は続く。

「なんで七日分の旅の荷物を一人で運んで、それでも僕を置いてい

けるラークつて……」

ブロンドの髪の少年は、皮のリュックの中からタオルを取り出し汗をふきながらまた歩く。

「あの常人離れした体力……本当に人間なのか疑うよねえ……。

」

リクスの口からついにはラークの非人間論まで飛び出し始めた。

「あ、でも……彼、魔人族だつた。

それにして相方置いて一人で先に進まないよねえ。

魔人族つてこうも白状なのかなあ。」

一体誰に話しかけているのか定かではない。

煌々と照りつける日差しが、リクスの体力を奪つていく。

ふらふらと、まるで風になびく雑草のようにリクスの体は揺れていった。

少し休憩を取るために地面から突き出した岩の陰に近寄る。しかし先客がいた。

先客の容姿は赤褐色の髪をし白銅の胸当ての下に着た半袖のシャツ、青白いズボン、革をひもで縛つたの靴。そして大きく開かれた口。ラークである。

一足先にラークはここの中陰で休憩、いや昼寝をしていたのである。寝癖のついたラークの髪の毛は長時間睡眠をしていた証拠である。

「…………」

ラークから息使いは聞えない。

野生の動物や同じ種族である人間が見ても、死んでいるかのような眠り。

気配すらも間近にいるリクスには感じとれない。

完全に自然と同化した形で寝ている。

リクスはある『悪戯』を思いついた。

足元に無数に転がっている石の中から手のひら程度の大きさの石を選び、

それをラークめがけて投げつける。

刹那

鈍い音とむかつきがリクスを襲う。

「あ・・・。」

どうやら寸前のところでかわされたらしい。

鈍い音はラークが寝返りをうつたために地面との衝突音であつた。
リクスは今度はさつきより遙かに大き目の石をラークめがけて投げ
つける。

が、またしても鈍い音。

リクスの投げた石はことごとく回避された。

完全に眠っている相手に。

リクスは震える拳を抑えて、ロッドを構えた。

「大地の守護者セルヴェントに我は告げる、
汝の加護を我が魔力と引き換えにもたらしたまえ。」

明らかに魔法の詠唱だった。

ブロンンドの髪の少年の足元からは魔法陣が浮かび上がり、
さらに少年が水晶のはめ込まれたロッドを天にかざした瞬間、
ラークを無数の巨岩が雨のように襲つた。

数分間その異常な雨はラークを中心には降り注いだ。

リクスから思わず笑みがこぼれる。

「54戦7勝47敗、僕の勝ちだね、ラーク。ふう・・・やつと勝
ち星を増やせた。」

術のためにずれた眼鏡を直しながら、少年はそう言つた。

「キンッ」と剣を鞘にしまう音が聞える。

煙が立ち込める中、良く見るとラークを中心には降つたはずの岩が切
断されていた。

リクスはまさかとは思つたが、風が煙を払うのを待つた。

「リクス残念だが俺の54戦48勝6敗だ。」

まだ煙が立ち込める中、声が聞える。

それは深紅の瞳をしたラークの声であった。

「やつぱり起きちゃってたんだ。残念だなあ、今度はやれると思つたんだけど。」

さりげない一言に恐ろしい意味は含まれてはいない。

「リクスあのなあ、いくらなんでも間近で魔法詠唱されて起きないやつの方がおかしいぜ？」

「だつてさあ前も言つたとおり結構威力下がるんだよ。」

「だからそれは気分的なものだろ？」

ラークは降ろしていた荷物をまた体に括り付け、出発の準備をする。

「あのねえ、魔法って言つるのは精神力を前提に行なうんだよ。」

「よくわからん。」

荷物を全部背負つたラークはすでに一步踏み出している。

「君だつて、その剣で普通は刀で行なう居合をする時に目を閉じて精神統一するでしょ？」

「ああ、するな。アレはイメージが大切だから。」

「それと同じだよ。想像力と創造力、魔法にはそれが必要何だよ、わかる？」

「専門外だ。」

遠くから聞える声にリクスは足早に近づいていった。

「つて、人が話してる最中に何でそんなに遠くにいるんだよ。」

「置いて行くぞ。」

「言つのがおそ～いッ！」

少年一人はさらに無数に岩が積み重なつた場所から遠ざかっていった。

日も傾くころ、まだ少年達は岩の群れの中にいた。

紅い髪の少年は、一人地図を持ちながら立ちすくんでいた。
そして地図を指が追い、赤い瞳がさらにそれを追う。

「どうしたのラーク。」

眼鏡が光る。

「あ、いや、ま、その、な、なんでもない。」

「・・・迷つたんだね。」

リクスの冷たい指摘。

「ま、迷つてなんか・・・。」

「迷つてなんかない?」

ラークはリクスに言葉を先に言われて四苦八苦していた。

「・・・・迷つた。」

ついにラークはリクスに押し切られる形で認める。

どうもラークは如何せん押しに弱いらしい。

結局リクスとラークの関係が保てているのはこのことも在るらしいのである。

ラーク本人は否定はしているが。

「とりあえず日も落ちてきたし、今日はここで休むか・・・。」

「そうだね、ちょうど嫌な気配もしないし、ここが最適だとおもつ。

少年二人は荷物を降ろした。といつても荷物を降ろしたのはラークだけである。

現に旅をしているときは全て荷物の運搬はラークの役目。

本人は『体力維持のトレーニング』といつているのだが、維持するだけで

その運動量とは信じがたいものがある。

「あ、ラーク焚き木の準備よろしくうーー！」

リクスは近くにあつた手ごろな石に腰掛けるとすぐに読書に没つた。

「へいへい、てカリスク君、ここには岩ばかりで木が一本も生えてないんですけど・・・。」

「ああ、一番大きい荷物の中にあるからそれ使って。」

リクスの指がちよいと、リュックを指し示す。

ラークの背負つたリュックは行きより帰りの荷物が重くなっていた。日が経つにつれて水と食料の分、減つていいくのが普通である。

当初は遺跡の調査でリクスが勝手に拾つたものを荷物に加えているのかと思っていたが

それはどうも間違いであったようだ。

ようやくリクスの発言でそれが判明される。

以前『エビ』を倒した時の森、フロートフォレストで使つた薪の残りをわざわざ持つてきたのだ。

「あそここの木つて結構燃焼効率よくつてさあ、しかも長く持つんだよねえ。

多分これを街で売つたら、それなりの額にはなるよ。」

リクスの鑑定眼は正しい。

彼の言うものは大体は高値で売れるのである。

一部はガラクタ同然のも含まれて入るがそれはただのリクスの趣味である。

ラーク達の仕事は前金としてもらつが後は結果次第で報酬が上下する。

仕事上で発生したトラブルなどで支払われる金は全てとはいえないがい自己負担だ。

たとえ実力がいくらあつても依頼にこたえられない場合、業界のブラックリストにも載る。

要は仕事を回してもらえなくなるのだ。

「相変わらず・・・金にがめついねえ・・・お前。」

ラークの呆れ顔。

「そんなんにがめつくは無いけどなあ・・・。言つなれば生き残る知恵つて奴だよ、ラーク君。」

「俺が故郷で生活していた頃は金なんか要らなくとも生活は出来たけどなあ。」

「そう言えば、僕達3年も『エビ』組んでるけどラークの故郷つてまだ聞いてなかつたよね？」

ラークの過去、それはリクスでもあまり知らない。

リクスとラークの出会いはガノワルド共和国とアースガайд王国の

戦争の中、

瀕死のラークを助けたことがきっかけだった。

そもそもこの戦争の発端は若い学者が『オープ』の存在を発見してしまった事から始まる。

それはかつての『創神大戦』で開発、実践投入された世界最強最悪の兵器である。

とある若い学者は、その研究成果を3ヶ国学会で提出した。そして『オープ』をめぐる戦いに発展した。

後に、『狂舞の殺戮』と称された戦いの最前線にラークはいた。

血で出来た霧、歩くたびに白骨化した屍が転がる大地の中心でラークは

勝利無き戦いを繰り広げていた。

そしていつしかラークは『レッドティアーズ』と呼ばれるようになつていた。

ラークの瞳と髪の色は殺した人数分だけ赤くなつていくとまで言われた。

そんなラークに怪我を負わせた人物、それはラークの師匠クロシス・クライズである。

クロシスはラークを『束縛された戦い』からラークを救い出すために、

瀕死と言つ形でラークを宣戦離脱させその直後からラークの師は失踪する。

その後、戦場を散策していたリクスに助けられたのだ。リクスが知っているラークの過去はこんなものである。

「ねえ、そろそろ教えてくれてもいいじゃあん。」

リクスの甘える声。

「時が教えてくれるよ、そう・・・時がくれば嫌でも・・・。」

ラークは『魔剣ノア』を“ぐつ”と握り締めた。

「何かつこつけてんの・・・大体予想はつくけどね。」

その間にラークは剣を研ぎ石で研ぎ始めている。

毎日の日課だ。

まず研ぎ石で剣を一通り研いてから、剣技の鍛錬を開始する。技の型を何回も反復させる。

速度はとこうと、超鈍足だ。

しかし、ラーケの剣は空を滑るように夜の冷たい空気に軌跡を描き出す。

その動作自体が芸術のようでもある。

そんな中、リクスとの会話は続く。

「予想？それは無理だろう。」

ラーケの苦笑い。

「アカデミーのあつたフライティアはまず違うね。」「ん？どうしてだ？」

ラーケの興味がリクスの言葉へと向けられる。

「だつて、あそこでアカデミーに入学できるとしたら貴族階級の人しか無理だから。」

「もしかしたら俺は貴族かもしれないだろ？」

リクスの天を搖るがす笑い声。

「それは無いねえ。だつて……。」

リクスは腹を抱えて笑っている。

「だつて何だ？」

ラーケは聞き返す。

「だつて気品のかけらも無いもん。どちらかつて言つと田舎物つて感じ。」

リクスの指摘に流石のラーケもむつとする。

「とりあえず、アースガイドの騎士団にいたんだからアースガイドが妥当だね。」

「残念、はずれだ。あ、そうだリナはそこの出身だぜ？」「シリナは・・・てことはやっぱり違うのか。」

なんなくリクスの沈んだ声。

「ああ、俺はジジイが死んだ後、移住したんだ。」

「なんかうそ臭い……、後でラークの彼女にでも聞いてみますか。

「だ、だから彼女って言つなあーちなみにリナも俺の出身地は知らん！！」

不意の発言にラークは赤面する。

「彼女に隠し事は浮気の種ですよ。 ラーク。」「

一通りの剣技の鍛錬が終わり汗を拭きながらラークは肩を落としていた。

「ところでああ。」「

リクスの皿は再び本に向けられていた。

「あん？なんだ？」

「いいかげん、薪に火を灯してよ。」「

「・・・・・・・・・・。」「

ラークは会話をしているうちにすっかり忘れていたようだった。

そしてこの土地に住む夜行性のミミズクロウの鳴き声が夜の訪れを知らせていた。

欠けることの無い月が雲に覆い隠され世界が闇に包まれる。いつしか鳥も鳴ぐのをやめ、寝静まっていたこり、無数の足音だけがひしめき合っていた。

そのひしめきは寝ているラーク達を取り囮むようにぐるぐると夜通し鳴り響いていた。

そして時間は過ぎ朝が来た。

朝の第一声それはリクスの一言から始まる。

「ラーク、ご飯まだあ？」
だがラークの反応は薄い。

「「」飯、「」飯、「」飯、「」飯、「」飯、「」飯、「」飯、「」飯、「」はあああん！」

そしてラーケが目覚める。

「朝っぱらからやかましい！ガキかお前は！…」「そんな言い方しなくつても良いじゃないか。お腹が空くつてことは健康の証なんだよ？」

「お前は何時如何なる時でも健康体だろ？が・・・。まったく、俺より年上なんだから

それに相応しい行動とれよ。」

ラーケはまだ開ききらない瞼をこする。

「年上つて言つても一つしか違わないじやん。」

リクスは川の水で顔を洗いながら答える。

「なあ、リクス。夜のあの音なんだつたかわかるか？音？そんなの聞えなかつたけど？」

「・・・・・・」

「な、なに？その妙な沈黙。」

顔を洗い終えたリクスはリュックから携帯食を取り出し食べ始めている。

「いや、お前に聞いた俺が馬鹿だつたなあつてさよつと血口嫌悪になつてただけだ。」

「うん、馬鹿。」

「くう・・・・・。」

ラーケから何か込み上げるものがあつたが、それはすぐさま解消される。

「あ、ラーケの言つてることもあながち嘘じゃないみたいだね。」「なんだよ、あながちって。」

「見てよほら。足跡が無数に僕達を取り囲んでるのにかかわらず、立ち去つた気配すらないんだよ。と言つたか移動した形跡が無い。まるでこのまま消え去つたみたいに。」「

いつのまにかリクスはリュックから測定器具を取り出し念入りに調

べ始めていた。

リクスの悪い癖の一つである。

そしてこの癖が発動したときの言葉は決まっていた。

「後一日ここに泊まるう。何故か分からぬけど微弱に魔力が検出されたんだ。

これ・・・面白い。」

もはや二つたリクスを止める手段はラークは持ち合わせてはない。

よつて、ラークも仕方なくリクスの研究につきはまることになる。

「なるべく早くリノーベルクに帰らせろよ。」

ラークの言葉はリクスには聞えてはいなかつた。

そして口は傾く。

「・・・・・早くでないかなあ」

鼻歌雜じりのリクスの声。

「あのさあ・・リクス。俺先に帰つていいか?」「だめ。」

リクスの即答。

「早く帰らねえトリナがうるさいんだよ。」

「ああ、後で魔法で転送するから待つて。」

「わかつた・・・。」

元々ラークはリクスの言葉を信用はしていなかつた。
なぜなら、何かに興味をもつたりクスを止められるものはいなかつたからだ。

ましてやリクスはことと真相を付きとめるまでは引き下がらない
タイプである。

よつてそつきの会話も、もう忘れているありさまだつた。

「空気が・・・おかしいな・・・。」

ラークが咳く。

確かに、以前の空気の質が変わったように思える。

生臭い。

肉の腐敗した臭い、ラークは以前にもそれを嗅いだことがある。

ラークが嗅いだ場所、それは戦場であった。

この手の臭いはいかなる場合でもラークの脳裏に過去の記憶をもたらす。

「死臭・・・・だよな、リクス。」

近辺の検査を終えたリクスは肩をほぐしながらラークの声に耳を貸す。

「だね。大丈夫かい?」

リクスの心配はなんなのだろうか。

「ああ、まだ正気は保てるよ。」

ラークは震える手を押さえつけながら剣を抜き入念に手入れしている。

その間にも死臭は濃くなつてきている。

”ガチャツ”、不意にラークが剣を落とす。

ラークはうつむきながら小刻みに震え自分を抱きかかえていた。

「ど、どうしたのラーク?!?!?」

流石にリクスにも焦りの色が見える。

『『オープ』が・・・『オープ』が俺を呼びやがる・・・。』

大量の汗、さらには呼吸も荒いラーク。

「な、何言つてるんだよ。『オープ』は君が破壊したんじゃないかな。

リクスは言った。

「た、確かに・・・俺が破壊した・・・。」

「クソオ・・・何故今更になつてまた『オープ』の副作用が出ているんだあつ?」

ラークの姿は自分から何かが出てくるのを抑えているようにも見えた。

「今すぐ転送しようつか?」

リクスはラークの症状が酷くなるにつれて後退し始めていた。

ラークには駆け寄れない理由。

それは『オーブ』からもたらされた鎖されたラークの狂氣の心が動くもの命あるものを容赦なく奪うからである。

現に周囲にいくらか生えていた雑草は既にチリになっていた。

「・・・・・ぐあつ・・・・・」

大量の風がラークを包み込み、ラークの症状は回復する。

リクスは慎重にラークに近寄る。

「心配させないでよ。まつたく。」

リクスの眼鏡が曇る。

「あ、ああ・・・すまない。しかし・・・」これはやばいかも知れない。

ラークからこぼれた弱気。

「一体ここに何があるんだろう。ラーク、君には酷かもしれないけど君みたいな犠牲者を出さない為にもひけなくなつたよ。」

リクスから笑みが消えた瞬間であつた。

「何を今更、『オーブ』があるならそれを破壊するのは俺の義務だ。」

「ラークは落とした剣を鞘に入れ、立ち上がり高く上った月を眺めた。

「な、臭気がやんだ・・・。どうこうことだ。」

リクスに問い合わせる。

「臭気はやんだけど今度は殺氣が充満してるね。しかもすぐ近くにいる複数の誰かから。」

「複数？この殺氣の量は戦争で渦巻く規模に匹敵するぞ。」

リクスの凍つた笑み。

「矛先は、やつぱり僕達だらうね。」

「間違いないそうだろうな。」

ラークの眼は鮮やかな赤になり始めていた。

”カツツン、カツツン”

小さな音がし始める。

「ねえ、ラーク見えない敵と戦つたことあるかい？」

リクスはと言うとせつかくラークの灯した焚き火を砂で消していた。

「それは幽霊つて意味か？」

「そう、幽霊。」

ラークは少し悩んだ結果、剣を鞘から抜き一言リクスに残してその場から消えた。

ラークの残した言葉それは「今から戦つといふだ。」だった。

丘頂の荒野の中にブロンンドの少年田を閉じている。

何をする訳でもなくただじっと立ち尽くしたままだつた。

ブロンンドの眼鏡をかけた少年の少し先には火の手が上がつていた。だが炎は立ち込めてはいるが、熱気を感じない。

つと、ブロンンドの髪のローブを羽織つた少年の口が開く。

「ラーク、もうちょっと・・・もうちょっとだけこらえて。」

火の手の上がる部分ではじゅやラークが戦闘しているらしい。

しかし、斬られたときにでるはずの絶叫その他、血の臭いすら感じられないのは何故であろう。

「荒野の亡靈・・・そんなのいるわけ無いじゃないか。」

リクスは何かを思い描いていた。

「まったく、何処の誰だ知らないけど。面倒な事するなあ。」

リクスは先ほどの調査で魔力を検出していた。

その魔力を検出したと言つことは何をさすかそれは・・・。

「この見えない敵の正体は・・・幽靈じゃないんだ、絶対に。」

リクスは確信していた。

「幽靈はいるとは思つけれど今回のこれは確實に幽靈なんかじゃない、なぜなら

幽靈は精神エネルギーの流動体、決して物質なんかじゃない。なのに何故足跡を残したのか。

誰かが『実験』をしているんだ。そう……あの『実験』を。「開いたリクスの眼が赤みを増す。

「…………もう少し、もう少しで術者の場所を特定できるのに。」リクスからは明らかに焦りの色が見え始めていた。

彼が今していること、それは自分の魔力を使い相手の領域へ干渉しそこから発信源を特定しようとしているのだ。

だがそれは集中力を極端に要するために、行動に制限が出来てしまうのである。

そのためラーケが前線に出てリクスへの敵の進撃を抑えているのだ。

「…………い、いたツ。こいつだ。」

リクスは術者の居場所に驚愕していた。

術者が発見した場所、

それはラーケが戦っている丘ではなく広大に広がる浅い河川からであつた。

同時刻ラーケは一人、剣技の練習をしているかの如く炎の渦の中で戦っていた。

無音の戦い、やはり炎の熱さは感じられない。

「手ごたえはあるのに、一向に減りはしないぜ。」

ラーケが剣で切り上げ、後ろに足の裏をスライドさせながら咳く。

「まったく、なんつー量の殺氣だ。」

ラーケから笑みがこぼれる。

「だが……おかしいな、何故一人一人襲つてくるんだ。」

ラーケは不思議に思つた。

常人ならばラーケは8人が同時にかかるても対処はできる技量である。

だが、一向に敵にその気は無い。

あくまでも一人一人戦い挑んでくるのである。

それはあくまで《気配》のはなしではあるが。

「なんていふか・・・戦い方が古い・・・」

剣を振るいながらラークはそう思つた。

そこへ一陣の巨大な閃光が大地をえぐりながらラークめがけてやってくる。

それに気がついたラークはとっさにその場から姿を消す。地面へと下降する中ラークは急に怒鳴り始めた。

「おい！リクス、今回のはマジだつただろう！！」

ラークは地面に着地しリクスによつてえぐられた道路を疾走する。そしてリクスの笑みが飛び込んだ瞬間、ラークは胸倉を掴みリクスに罵声を浴びせる。

「お前、完全に俺もるとも殺るつもりだつたろう！－！」リクスは軽くラークの手を払い、穏やかに言った。

「でも避けられたじやな。」

その顔には笑みを浮かべている。

「そういう問題があ！－！」で、特定できたのか。」

流石に慣れているだけのことはあつて切り返しが早い。慣れと言うものは怖いものである。

ラークは”キン”と剣を鞘に入る。

「ああうん、それがさあ、あっちの方角からなんだ。」

「あつちつて、川じゃないか。まさか川の中にはいるのか？」

ラークは驚きの表情を浮かべた。

「うん、あそこが一番魔力が強いんだ。多分術者はそここいる。」

「魔力が強いって言われてもなあ、俺には魔力を感じることは出来ないんだが。」

遠まわしにラークは何かを催促する。

「わかつたよ、今視覚化するから。」

リクスは目を閉じ金の装飾を施されたロッドを地面に突き立てた。しばらくすると青白い光が霧のように現れ始めた。

「ハイ、終了。どうわかつた？」

リクスは淡々と喋る。

リクスが行なつたことは、他の魔力への干渉の応用系。

すなわち自分と相手の魔力を混合することにより、本来視覚化でき

ない魔力の

形を、化学反応のように見る事ができるようにするためのものである。

しかしこの技術は、リクスのオリジナル。

むしろ、高等魔術師しか出来ない芸当なのである。

大きな理由は一つ、相手の魔力より同等以上の力を使わない限り使用出来ないのである。

「んじゃ、後よろしく。」

リクスは座り込み、読書をし始めてしまった。

「流石のセンセも疲れましたか。」

ラークはからかう。

「そりやあ、これだけの魔術を使つたんだからね。」

「と言づかお前が・・・あの『戦陣の閃光』で半分以上の魔力使つたせいだろうが。」

と言い残しつつラークの姿はまたしてもその場から消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8775d/>

月の楔 Lunatic Organic Blood

2010年10月17日07時55分発行